

# 鯨 研 通 信

第 382 号

1992年 3月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104 東京都中央区豊海町 4 番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)



## 最近の北太平洋における大型クジラ類の出現

—偶発的な発見記録より—

重 宗 弘 久 (共同船舶株式会社)

宮 内 一 利 (早 稲 田 大 学) \*

笠 松 不 二 男 (日本鯨類研究所) \*\*

はじめに

北太平洋における大型クジラ類の分布・出現に関する情報は、捕鯨操業における操業船の発見報告や捕鯨船団所属の探鯨船や目視調査船によって過去かなり集積されている。1976年からは、水産庁遠洋水産研究所によって捕鯨操業と独立した組織的な目視調査が実施されている。更に、1987年からは、アリューシャン列島以南、北緯20～30度以北の北太平洋全域をカバーする大規模な目視調査が水産庁によって毎年8～9月に実施されている。これら組織的な調査や捕鯨操業からの情報とは別に、日本共同捕鯨（1987年に現共同船舶へ移行）では1978年から、目視調査及び捕鯨操業以外

の航海に従事する際に得られた偶発的な発見についても将来何かの役にたつことを期待して自主的に情報が集積された。これは強制された報告ではなく、自主的な報告であった。船の主な任務はクジラを発見することではないが、乗組員は捕鯨船員であるので目の前に出現した、あるいは目に入ったクジラには強い関心を示した。乗組員は、捕鯨操業に長年の経験を有する人々であるために、大型クジラの種の判別は正確である。

これらの船の航海は、北太平洋全域を均一にカバーしていない。オホーツク海やアラスカ湾南部や東太平洋での航海は少ない等、ある特定の海域での航海が多かったり少なくなっている（図1）。しかしながら、

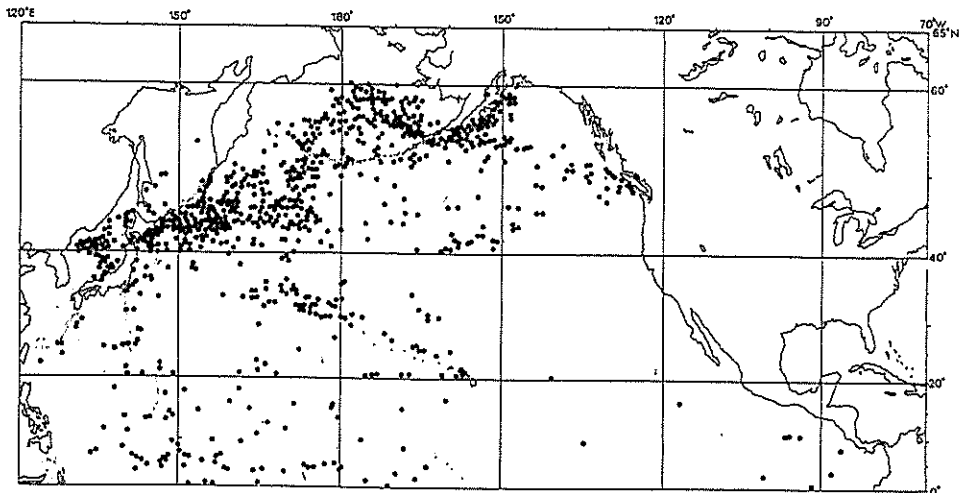


図1 全鯨種

注) \* 現大洋漁業株式会社      \*\* 現 (財) 海洋生物環境研究所

航海は夏場だけでなく周年行なわれており、従来の捕鯨操業や目視調査航海が夏場に集中して夏場の情報のみであるのに対し、これらの周年の航海からは様々な季節での大型クジラ類の出現に関する情報が得られることが期待できる。本報告では、これらの偶発的な発見情報をまとめて、最近の北太平洋、ベーリング海、オホーツク海、日本海での大型クジラ類の出現を、4～10月期と11～3月期の二つの季節で解析し、その出現状況を報告している。

## 材料と方法

本報告で使用した資料は、1978年から共同捕鯨及び共同船舶に所属する船舶の乗組員から自主的に報告されたものである。これらの報告には発見日時、位置、鯨種、頭数が記録されている。発見日時、位置、鯨種は正確である。しかしながら、業務が鯨を観察することではないことから観察時間が十分にとれないこと、十分接近できない等の制約のために、群数、頭数の推定に高い精度を期待することは酷であろう。

これらの個々の発見記録を4～10月期（ヒゲクジラの場合おおよそ摂餌のために北上し、北方海域に滞在する時期）と11～3月期（おおよそ南下と繁殖のために低緯度に滞在する時期）とに分けて、その出現をみた。11～3月期の出現は特に興味深いので発見された月を図中に示した。

本報告では、ヒゲクジラ類7種（シロナガスクジラ、

ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、セミクジラ）とハクジラ類2種（マッコウクジラ、ツチクジラ）の出現を扱った。

## 結果と考察

### セミクジラ

もっとも資源が減少し、その後の発見情報が少ない種である。図2に発見分布を示した。合計16頭が発見されている。近年本種の発見情報はきわめて少ないことから、これらの発見情報は非常に貴重と思われる。

セミクジラの出現は、二つの海域に集中している。その一つは、千島列島南方北緯40～50度、東経150～165度内の海域である。この海域では4～6月に発見がなされている。他の一つは、アリューシャン列島東側の海域である。ここでは7～11月で発見されている。この海域では、過去にも出現が多かった海域であり、1961～63年に合計9頭が特別捕獲されている (Omura *et al.* 1969)。一方の出現海域の北海道東方～千島列島南側でも1956年に2頭特別捕獲されている (Omura *et al.* 1969)。このほか本報告では示されていないが、このほかオホーツク海の樺太東側でまとまった出現が過去に報告されている (Kato and Kasuya, 1990; Omura *et al.* 1969)。

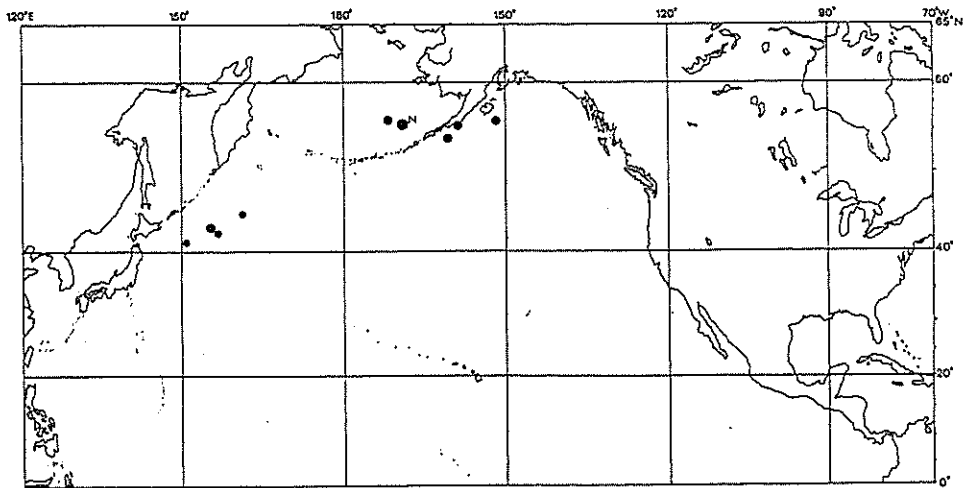


図2 セミクジラ（全期）

9群16頭

● 1頭

● 2頭

● 3頭以上

ザトウクジラ

資源がかなり減少したがその後資源の急速な回復が報告されている種である。4～10月期で合計 286 頭、11～3月期に合計66頭発見されている。図3 a、3 b に発見分布を示した。4～10月期では北緯40度以北での出現がほとんどである。この期間アリューシャン列島東側～アラスカ湾北部のコジャック島近海での発見が多い。一方、西太平洋側では、千島列島東方～カムチャッカ半島南方で比較的まとまった出現がみられる。11～12月期でもコジャック島周辺で引続き出現がみられる。一方、2～3月期にハワイ諸島周辺でまとまった発見がみられる。沖縄で発見された1群5頭は、5

月22日の発見であり、この付近に5月末まで滞在していることは興味深い。11～3月期での北太平洋西側では、小笠原で1頭（2月14日）と北緯20度40分、東経161度52分で1群2頭（11月17日）の合計2群のみであった。後者の発見は、北太平洋での繁殖海域がメキシコ、ハワイ、小笠原、沖縄の四つの海域に集約されていることを考えると、この小笠原とハワイの間での発見は興味深い。

密度に関しては、使用しているデータの性格から、多くのことは語れないが、図3 a から北西太平洋側より北東太平洋側に出現する個体が多いことが示されそうである。

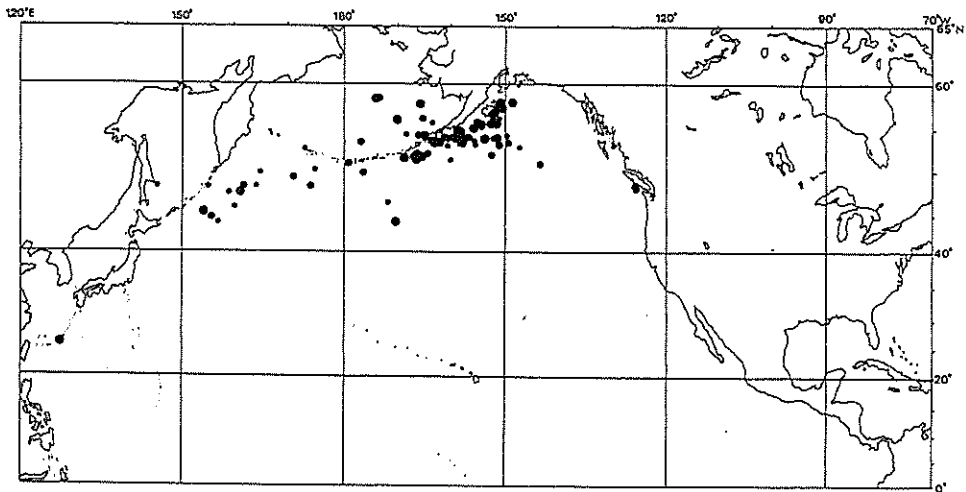


図3 a ザトウクジラ (4月～10月)

100群286頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

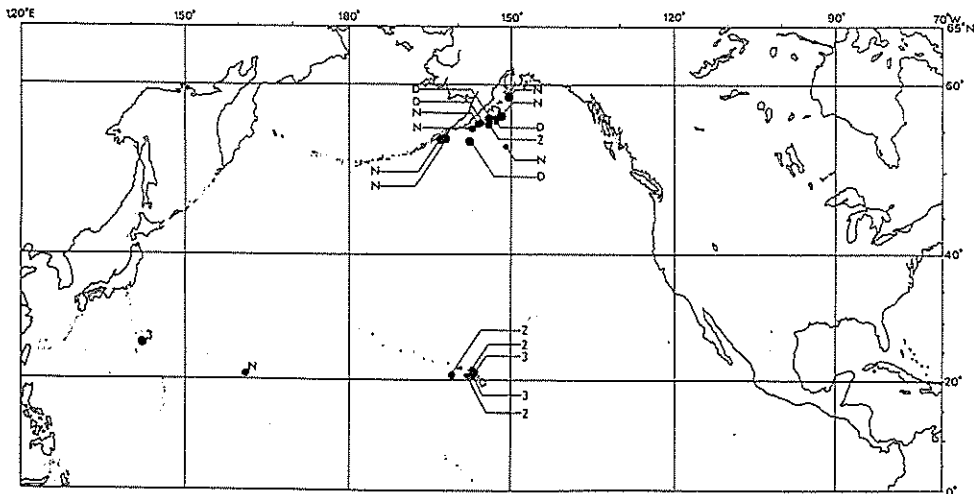


図3 b ザトウクジラ (11～3月)

21群66頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

シロナガスクジラ

セミクジラ程ではないが、やはりかなり資源が減少した種である。合計18頭が発見され、すべて4～10月期の発見である。図4に発見分布を示した。この図から、比較的まとまった発見が北緯40～50度、東経150

～180度の北西太平洋にみられる。一方、東経180度以東の北東太平洋では、ハワイ諸島北側北緯30度、西経165度付近にまとまった発見があるが、そのほかはバンクーバー島沖で1頭のみであった。このほかアラスカ湾北部やベーリング海での発見はなかった。これらのことは、次のナガスクジラと比べるときわめて興味深い。

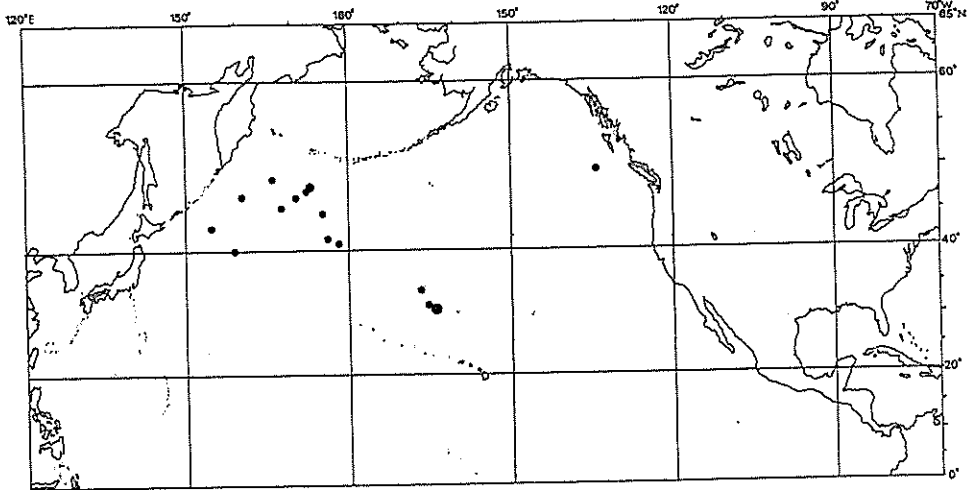


図4 シロナガスクジラ (4～10月)

15群18頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

ナガスクジラ

1976年に捕獲が禁止された。4～10月期に合計805頭、11～3月期に合計77頭の発見が報告された。図5 a、5 bに発見分布を示した。4～10月期の発見は、ベーリング海、オホーツク海、日本海、北太平洋のほ

ぼ全域でなされている。特に、ベーリング海のプリビロフ諸島周辺、アラスカ湾北西部に特に集中した発見がみられる。そのほか、バンクーバー沖、カムチャッカ半島南方でも比較的まとまった発見がなされている。これらの発見状況は、過去の捕鯨操業の情報とよく一致していると思われる。11～3月期の発見は興味深い。

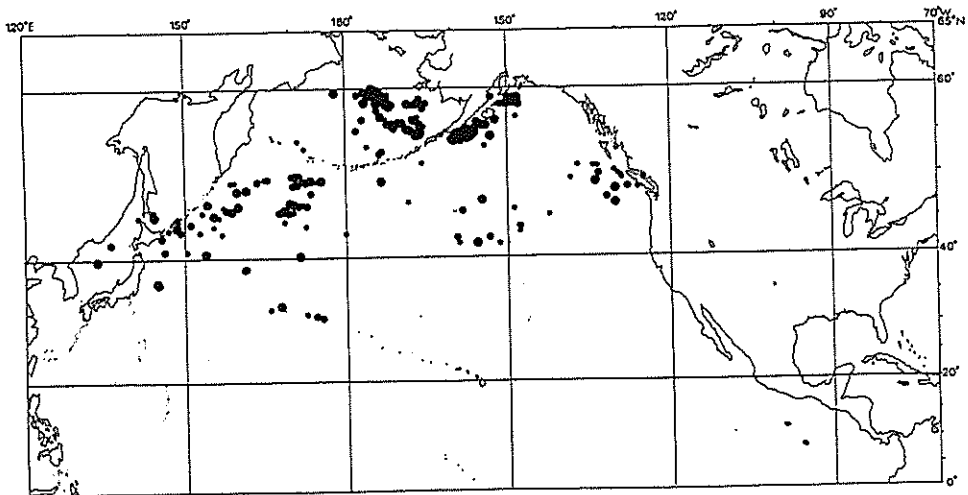


図5 a ナガスクジラ (4～10月)

251群805頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

ベーリング海では冬場でも南下せずにこの海域に滞在する個体がいることを明確に示している。更に、千島

列島東岸沖にも真冬にも滞在している個体がいることも興味深い。

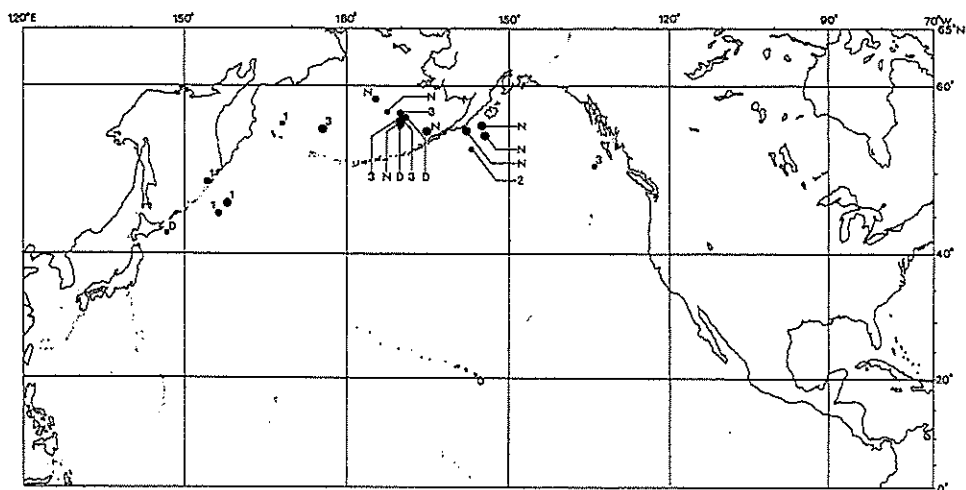


図 5 b ナガスクジラ (11～3月)

22群77頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

### イワシクジラ

1978年から捕獲禁止。4～10月期に合計 137 頭、11～3月期に 5 頭の発見報告がなされている。図 6 a、6 b に発見分布を示した。ベーリング海、オホーツク海、北太平洋に発見がある。ナガスクジラに集中海域

がみられたのとは異なり、本種ではそれほど明確な集中海域がみられず、北西太平洋とベーリング海にばらっと散在している。発見のほとんどは北緯40度以北でなされている。冬場の本種の発見は少ないが、ナガスクジラと同様にベーリング海で真冬に発見がみられたことが興味深い。

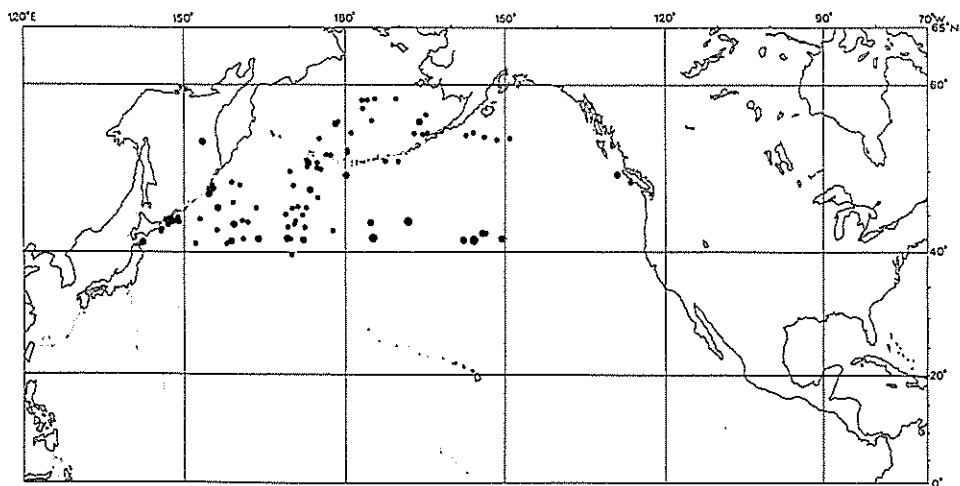


図 6 a イワシクジラ (4月～10月)

99群137頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

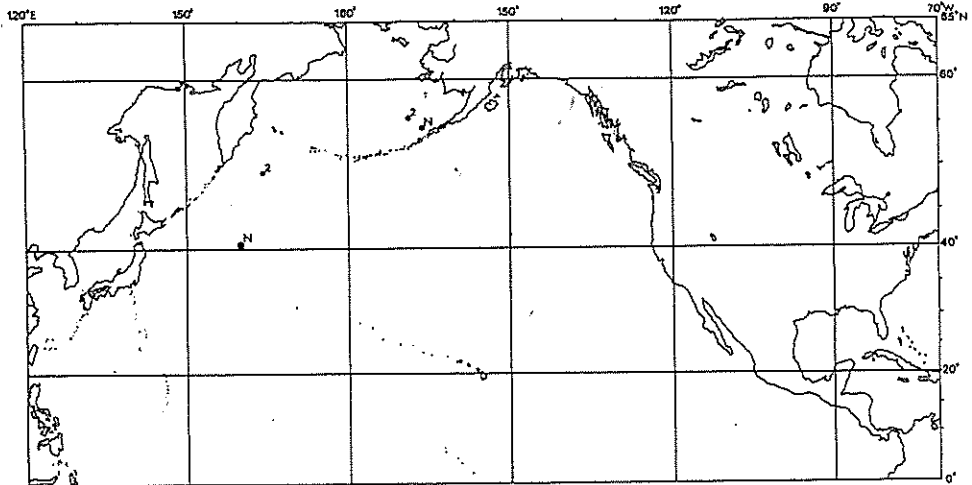


図 6 b イワシクジラ (11~3月)  
4群5頭

ニタリクジラ

1988年から捕獲が禁止された。4~10月期に合計109頭、11~3月期に合計115頭の発見記録が寄せられて

いる。図7 a、7 bに発見分布を示した。4~10月期の発見は、赤道付近から北緯40度にかけてなされている。集中した発見がハワイ諸島からミッドウェー島にかけての海域にみられる。この時期にも北緯20度以南

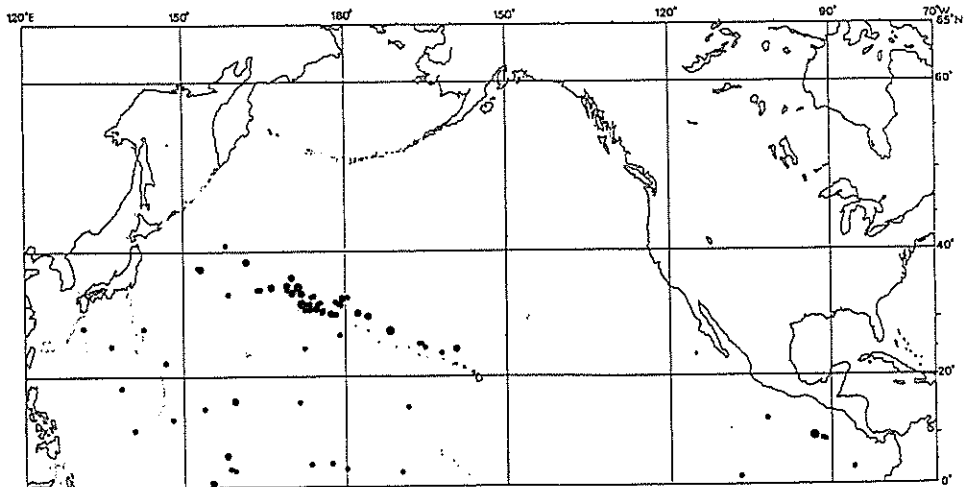


図 7 a ニタリクジラ (4~10月)  
75群109頭

● 1頭    ● 2頭    ● 3頭以上

に出現しているのは興味深い。かりに資源量推定が北緯20度以北に分布する資源についてのみ行なわれていたとすると、かなりの資源がカバーされていないことになる。夏場の本種の分布に関する情報は、目視調査航海からかなり蓄積されているが、冬場の情報は少ないので図7bは興味深い。この図から11～3月期には、小笠原、伊豆諸島の発見を除き本種のほとんどの発見は、北緯20度以南でなされていることが分かる。この

海域では、赤道～北緯10度、東経140～160度付近に比較的まとまった発見の集中海域があり、この付近が本種の繁殖海域になっていることを示唆している可能性がある。しかしながら、北緯20度以南では、東経135度から西経160度まで大きな分布のギャップもなく、発見が続いているので本種の繁殖は、かなり広範囲に行なわれていることも考えられる。

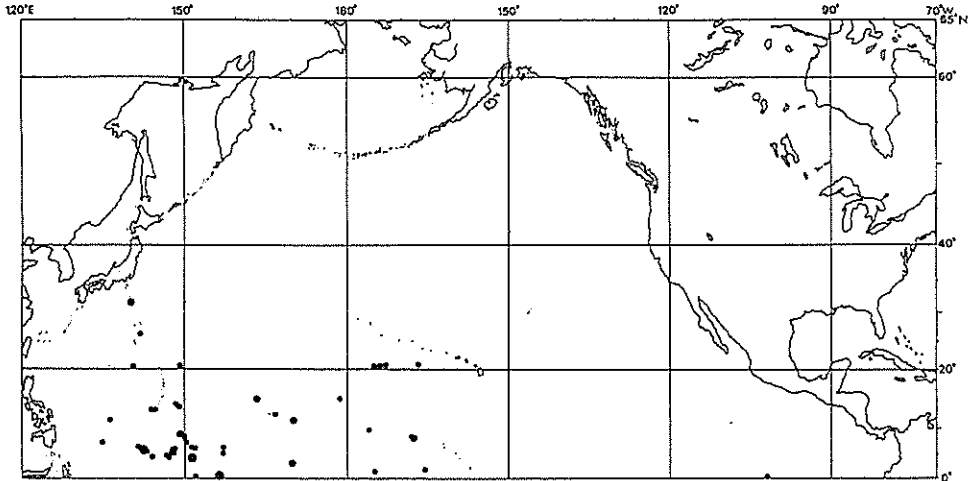


図7b ニタクジラ (11～3月)

52群115頭

● 1頭 ● 2頭 ● 3頭以上

### ミンククジラ

1988年から捕獲が禁止。4～10月期に合計534頭、11～3月期に合計53頭の発見報告が寄せられている。図8a、8bに発見分布を示した。4～11月期をみると、本種の発見は、日本海、オホーツク海、ベーリング海、北太平洋にみられる。特に日本沿岸から北西太平洋、ベーリング海にかけてよく発見が報告されている。発見は、明確な分布のギャップはないが、日本海、

道東、ベーリング海で比較的集中した海域がみられる。北太平洋東部ではきわめて発見が少ないことが興味深い。現時点ではこの理由は定かではない。本種の夏場での出現についてはやはり目視調査から詳しく報告されているが(Kasamatsu and Hata, 1985)、他の種類同様に冬場の発見情報が興味深い。図8bをみると、比較的低緯度での発見が少なく、冬場でも日本沿岸にみられることが注目される。他のナグスクジラ科鯨類と同様冬場でもベーリング海に出現している。

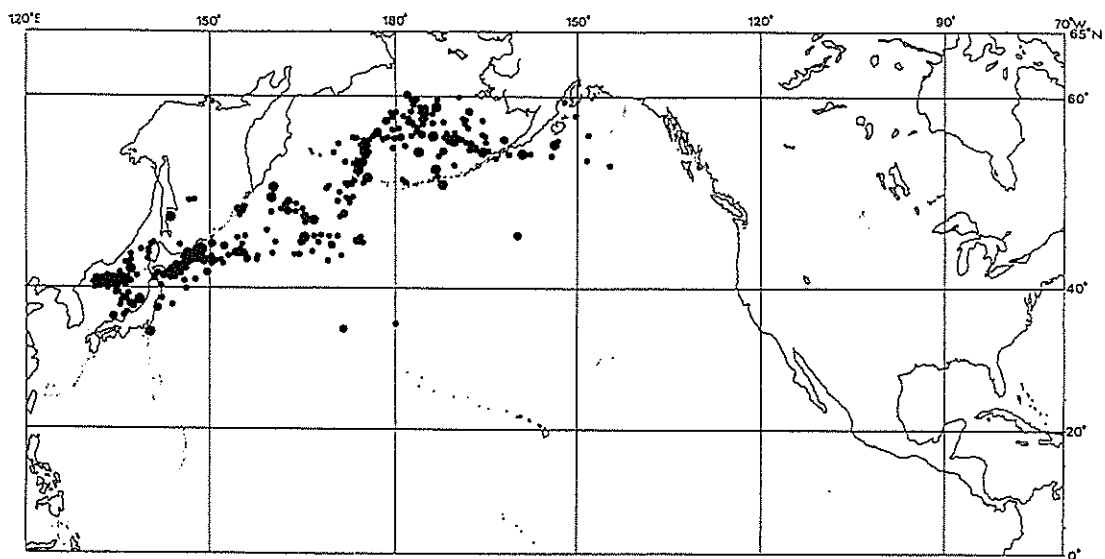


図 8 a ミンククジラ (4～10月)

397群534頭

• 1頭    • 2頭    • 3頭以上

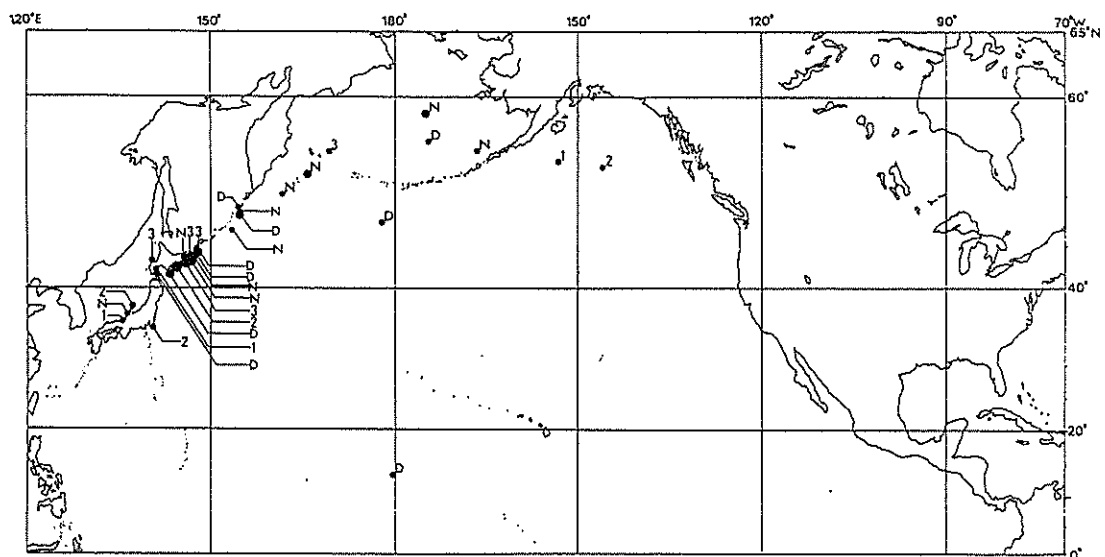


図 8 b ミンククジラ (11～3月)

36群53頭

• 1頭    • 2頭    • 3頭以上



マッコウクジラ

1982年から捕獲が禁止。4～10月期には合計1,437頭、11～3月期には合計249頭発見されている。図9 a、9 bに発見分布を示した。4～10月期では、ベーリング海、オホーツク海、日本海、と赤道からアリューシャン列島までの北太平洋のほぼ全域で発見が報告されている。特に、北緯45度線の東経145度から175度

までの間に集中した海域がみられる。一方、冬場はベーリング海、オホーツク海、日本海から発見報告はなくなり、道東沖と北緯20度以南の海域に発見が報告されている。冬場の分布で道東沖の集中海域と北緯20度以南の海域での分布が興味深い。北緯20度以南での分布では特に集中した海域はみられない。この海域での繁殖には特に決った海域がないのではないかと考えられる。

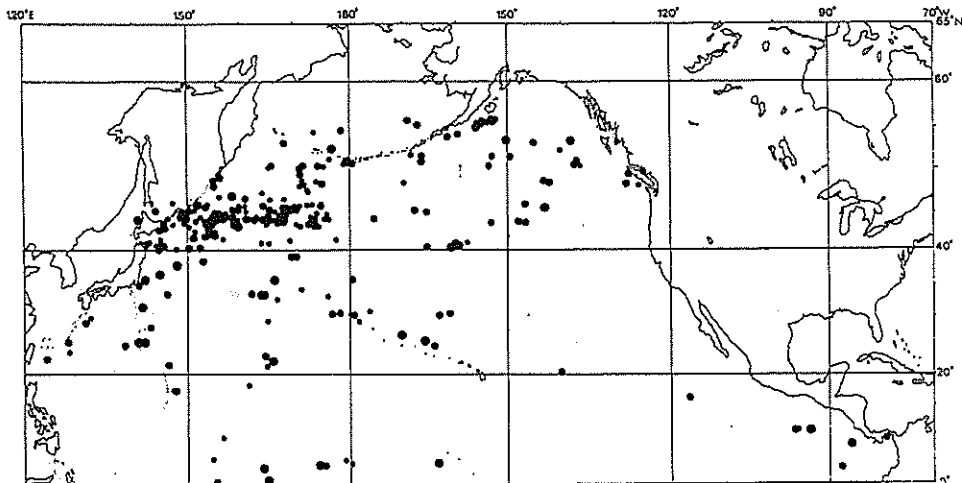


図 9 a マッコウクジラ (4～10月)

300群1,437頭      • 1頭      • 2～9頭      • 10頭以上

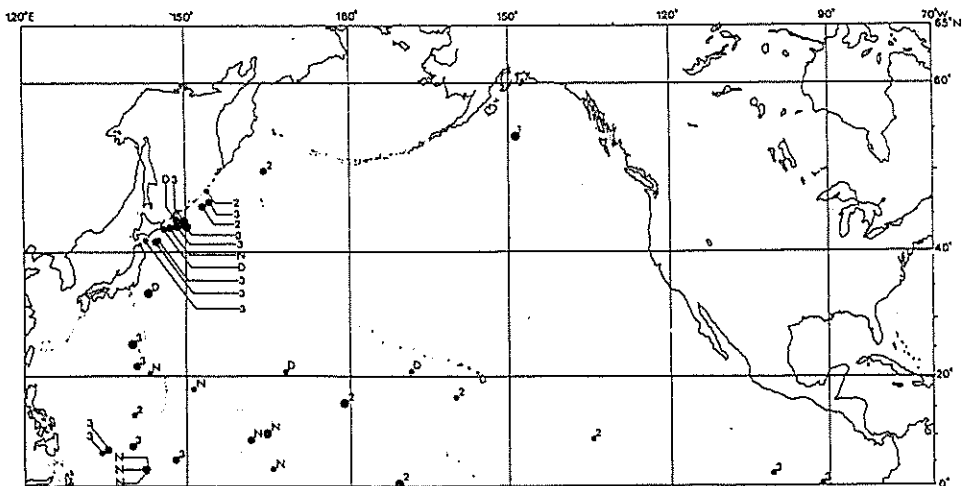


図 9 b マッコウクジラ (11～3月)

41群249頭      • 1頭      • 2～9頭      • 10頭以上

## ツチクジラ

現在房総、三陸、オホーツク海で小型捕鯨業によって年間40頭程度捕獲されている。4～10月期に合計255頭が発見され、11～3月期には2頭発見された。図10に発見分布を示した。ベーリング海、日本海、北西太平洋に発見が報告されている。沖合での報告は少ない。房総、道東、日本海に比較的集中している。冬場の発見は12月19日の道東沖での2頭だけである。

## 終りに

すでに述べたように、航海は、北太平洋、ベーリング海、日本海等を均一にカバーしていない。したがって、得られた発見情報は、鯨の密度や分布範囲等を正確に反映していない。しかしながら、近年特定の海域にある種の鯨が、出現していることを明確に示している。更に、情報の少ない冬場の出現情報は、これまでの目視調査や捕鯨操業が夏場に集中していたのできわめて貴重である。すでに各鯨種のところで述べているが、ヒゲクジラでも冬場に低緯度へ南下しない個体が存在することを明確に示していることや、冬場の低緯度での分布の様子はなんらかの繁殖場の様子の情報を提供していると思われる。

北太平洋とその周辺海域での鯨類の分布については、古くは、Nishiwaki (1967) によって包括的に示されている。この報告後すでに23年も経過している。北太平洋及び周辺海域における鯨類の包括的な出現の情報が待たれる。

## 謝辞

本報告に使用した貴重な発見記録は、共同捕鯨・共同船舶所属の船長始め乗組員各位の努力の賜で、ここに厚くお礼を申しあげる次第です。本報告をもってこれらの努力に多少でも応えられるのではないかと希望するものです。今後ともこのような貴重な情報が自主的に収集されることを期待します。

## 参考文献

- Kasamatsu, F. and Hata, T. 1985. Notes on Minke Whales in the Okhotsk Sea-West Pacific Area *Rep. int. Whal. Commn* 35:299-304.
- Kato, H. and Kasuya, T. 1990. Catch history of the Asian stock of gray whales. Paper SC/A90/G19 submitted to meeting of the IWC Comprehensive Assessment of Gray Whale, Seattle April, 1990.
- 西脇昌治 1965年 鯨類・鬚脚類 東京大学出版会.
- Nishiwaki, M. 1967. Distribution and migration of marine mammals in the North Pacific area. *Bull. Ocean. Res. Inst. Univ. Tokyo*, 1:1-64.
- Omura, H., Ohsumi, S., Nemoto, T., Nasu, K. and Kasuya, T. 1969. Black right whales in the Northern Pacific. *Sci. Rep. Whales Res. Inst., Tokyo* 22:1-78.

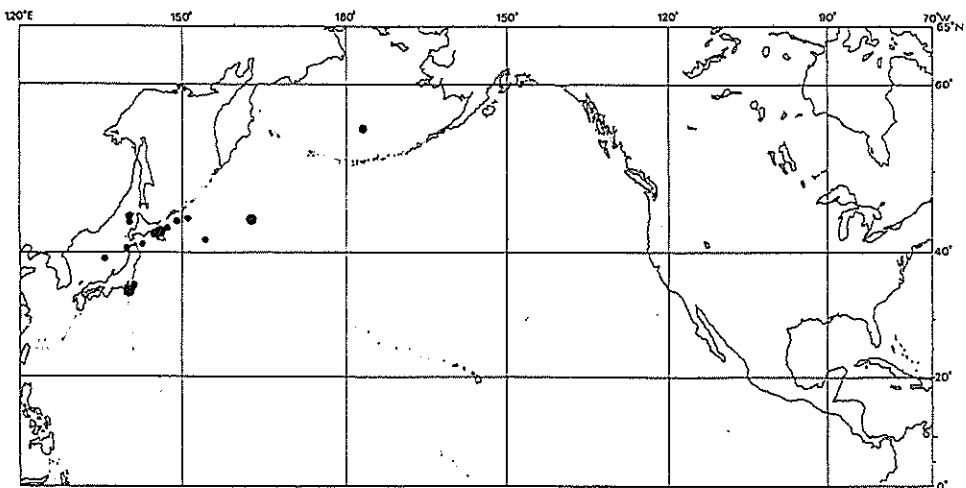


図10 ツチクジラ (4～10月) (11～3月) △ 2頭 22群257頭  
 ● 10頭以下 ● 11～19頭 ● 20頭以上 (12/19)

## ニホンアシカの異名について

神奈川県立博物館 中 村 一 恵

本誌 381 号において、本間義治氏 (1991) は、古文書の記載にある「……海獺なるべし」を真に受けて、アゴヒゲアザラシ (?) をニッポンアシカに誤認したのではないかのご自身の体験を記して、「海獺のみならず、海鹿 (あましか)、海驢 (かいろう)、うみおそ、みち、と呼ばれてきた動物が、果たして真のアシカのみを指したかどうか疑わしい」との指摘をなされた。

アシカの呼称については、地域や時代により違いのあることが明らかにされている。なかでも、日本海沿岸の一部で「トド」がアシカの異名であったことを認識することが重要と筆者は考えているが、今後、地域ごとに詳細な検証を進めることが必要なのは確かである。そこで、これまで得た若干の資料を基に私見を述べてみたい。

小野蘭山 (1729-1810) の『本草綱目啓蒙』は、1 種の植物あるいは動物が、地方によって呼称を違えていることを知るうえできわめて重要な文献である。それを見ると、アシカについても、地方ごとにさまざまな呼称のあったことがわかる。筆者の手元にあるのは、『重修本草綱目啓蒙』である。これは『本草綱目啓蒙』の第 3 版に当たり、梯南洋の校正により天保 15 年改元弘化元年 (1844) に刊行された。

本草学者の松岡玄達 (1668-1746) によって、本草学は薬物の学としてよりも博物学の方へ前進したが、動物に関する記載部分は蘭山の『本草綱目啓蒙』によって学問としての形態が整えられたと評価されている (上野、1987)。

『卷之三十四獣部目録』に、「ミチ古名、ウミヲソ、ウミウソ、ウミカプロ、アシカ筑前、アジカ豫州、トド能州」などが「海獺」の異称としてあげられているが、この「海獺」がアシカ *Zalophus californianus* を指していることは、形態や生態の記述から明らかである。

福岡県の一部では「アシカ」、四国の愛媛地方では「アジカ」、能登では「トド」という地方名があったことを蘭山は伝えているわけだが、最も注目すべきは、能登ではアシカのことを「トド」と呼んでいたことであろう。

蘭山は、「能州七ツ島ニテ鳥銃ヲ以テ打捉リ煎ジ油ヲ取テ大坂ニ出シ売ル」と記述している。『本草綱目啓蒙』に記載された各地の動植物の方言は、上野 (1987) によると、地方に散在した門人から得たものにちがいないということだが、蘭山の記述に大きな誤りがないことは、江戸中期から明治にかけて七ツ島で行われていた胡狼ころうの資料 (左古、1985) に照合すればわかる。ただ、この資料によれば、油は、皮革とともに、大阪ではなく、主に越中、越後 (富山、新潟) 方面へ出荷されたようではあるが。

重要なのは、能登地方では「トド」がアシカを指す言葉であって、その猟期 (5 月後半から 7 月後半) から考えても、七ツ島で銃獲の対象となっていたのが、トド *Eumetopias jubatus* ではなく、アシカ *Zalophus californianus* であったと考えられることである (中村、1991)。

「トド」がアシカの異名であれば、「トド島」イコール「トドが上陸した島」とは限らなくなる。島根県以北の日本海沿岸には、トド島とかトド岩といった地名が多数残されているが、少なくとも能登や佐渡以南に分布するトド島は、主としてアシカ *Zalophus californianus* に由来する岩礁小島を指していた可能性が高い (伊藤、1979; 中村、1991)。「佐渡にはトド岩があることから、古くからまれに (トドが) 来遊してくるようである」(池原ら、1990) のように、トド岩とトド *Eumetopias jubatus* を直接結びつけた書き方がなされることがあるので、再度この点を指摘しておきたい。

Kuroda (1938) は、アシカの方言の一つとして、伊豆七島のウミヤウジをあげている。これは西脇 (1965) によっても「ウミヨウジ」として踏襲されている。しかし、これが本当にアシカの異称であったろうか。

秋山富南 (1723-1808) の『豆州志稿卷之七』に、「海鹿 (海鼠ノ類也 黒色ニシテ切レバ鮮血迸り出ツ煮テ食ス可シ 西浦ニ多シ 大島ニテハ海ヤウジト呼ブ)」とある。

伊豆大島で海ヤウジと呼んでいたのは、以下に示す、江戸時代の博物学者・小原良貴 (桃洞) (1746-1825)

の『桃洞遺筆・卷中』の記述から推定して、おそらくアメフラシであったろう。「巖石上に海鹿（ウミシカ）という物あり、一名フルワラジ。常陸又雨フラシ。」という記述であるが、添えられた写生図（図参照）はまさしく軟体動物・腹足類のアメフラシである。

伊豆半島で「海鹿」と呼ばれていたのはアメフラシであったと思われ、そのアメフラシが伊豆大島ではウミヨウジと呼ばれていた、ということであろう。いつの日か、誰かが、ここで言う「海鹿」をアシカと誤伝し、ウミヨウジがアシカの異称となってしまったのではなからうか。

次に問題となるのは、ウミヲソ、ウミウソ、ウミカプロであろう。これらは現在でもアシカの異称とされ、ウミヲソやウミウソは川のカワウソに対する海のカワウソであり、ウミカプロは海禿の意と考えられている。ウミカプロ（海禿）は、アシカの雄の白い頭を禿と見た表現ではないか（伊藤、1979）、海面からもたげた頭が坊主頭に見えるところに由来した表現ではないか（山下、1990）、などの解釈がなされている。

さて、滝沢馬琴（1767-1848）の随筆に『烹雑之記』という作品がある。馬琴は江戸後期の小説家であったが、随筆において学問考証の成果を問うこともあった。『烹雑之記』はその一つである。

佐渡での見聞を記した中に、「寄鯨、稀にあり、珈瑠、このもの、元文三年のころ獲たりし事ありとぞ。海亀は常にあれども、玳瑁はそのうち聞えず。海獺、海豹、稀にあり。葦鹿、北海の俗、トゞといふ。」という一文が『巻之上』にある。寄鯨は海岸に漂着するクジラのことであり、玳瑁はウミガメの一種のタイマイである。海豹はアザラシを指したのであろう。

ここで注目されるのが、海獺と葦鹿である。ウミガメ類を「玳瑁」と「海亀」（アカウミガメのこと）の2種に分けているところから推定して、「海獺」と「葦鹿」も2種類の動物を指したものであろう。葦鹿は、俗にトドという註釈があるところからアシカ類を指したものであろうが、では、海獺は何を指したものであったか。

田中葵園（1782-1845）の『佐渡志卷三』からヒントが得られる。「海獺」は獣類に、「胡獺」は魚類に分類されてはいるが、ここでも、『烹雑之記』同様、「海獺」と「胡獺」とが区別されている。

まず「海獺」であるが、それについては、「海獺方言うみかぶろ 加茂郡阿津辺にあり 能人をたぶらかす」と記述されている。「海獺」の方言がウミカプロと表現されていることがとくに注目される。次に「胡

獺」であるが、「胡獺あり方言とゞ 又あしかとも云ふ 加茂郡鷲崎の海上にとゞ島あり 群をなして能眠 膩多し」と記述されている。

「海獺」がアシカであり、「胡獺」がトドをそれぞれ指したのであれば問題ないが、「胡獺あり方言とゞ 又あしかとも云ふ」とあるように、2種のアシカ類を指したのではないから、『佐渡志』に記載された「海獺」は、アシカ類とは別の動物を指したのではなからうか。

アシカが「人をよくたぶらかす」動物になったとは考えにくい。アシカはトド島とかトド岩と呼ばれた岩礁小島に上陸はしても、人の住む海岸には上陸しなかったであろう。が、カワウソであれば、日本産のものは内陸の湖沼や河川だけでなく、海岸にも住んでいた。佐渡に「人をよくたぶらかす動物」がいたとすれば、それはカワウソではなかったか。

各地に伝わる河童伝説はカワウソであったと見られている。後足で立ってあたりを見渡す姿は人間を連想させるし、水に濡れた毛から受ける感じがヌメヌメしたものであるのも、河童伝説に拍車をかけるものであったろう。佐渡では「海獺」をウミカプロと呼んだのは、こうしたカワウソの生態からの連想であったのではあるまいか。柳田國男ら（1938）は、『佐渡志』から引いたウミカプロという漁村語彙を信仰事相に分類している。それによると、「カプロは髪（カ）の形、髪をカプロ形に剪（き）った童子」である。ウミカプロが童子のイメージであれば、アシカよりはずっと小さいカワウソのほうがふさわしいかもしれない。

佐渡では「海獺」がアシカ類ではなく、カワウソを指す言葉であった可能性もある。ただし、こう判断するには、佐渡にカワウソが分布していたことを確かめねばならないが、仮に佐渡にカワウソがいて、「海獺」がカワウソを指した言葉であったとしても、それが全国的にカワウソを指した言葉であったとは考えにくい。

先に紹介した小原良貴（桃洞）の『桃洞遺筆巻之一』に、和歌山県日高郡のアシカ島に関して、次のような記述がある。

「本州日高郡衣奈庄大引浦より、地方を離ること四町許にして、周囲百四十間余の小島あり。毎年秋の土用前後には海獺此の島に來たりて春の土用前後には何れにか帰る。故に此の島を往年より葦鹿島という」。

この書の「海獺」の記載と図は間違いなくアシカである。蘭山の『重修本草綱目啓蒙』でも、カワウソは川獺（ヲソ、カワヲソ、カハソ、カハヅツ防州）として、海獺（アシカ）とは動物学上で明瞭に区別されている。

「海類」という字句は、やはり一般にはアシカを指したものであったろう。

海馬や海驢と書いて、トドともアシカとも読ませたり、時に海馬は魚類のタツノオトシゴを意味することもある。海鹿と書いて、アシカを指したことを示す古文書がある(山下、1990) 一方で、ここで述べたように、軟体動物のアメフラシを指すこともある。海類は一般にはアシカを指すが、佐渡のようにカワウソを指していたと考えられる場合もある。

つい近年まで、「胡猿」はアシカの異称であったのではないかと疑わせる資料もある。『広辞苑第 2 版(1969)』を見ると、トド(胡猿)とアシカ(海馬、葦鹿、海驢)とは生物学上ははっきり区別されている。ところが、大正 6 年(1917) 発行の『大日本国語辞典』では、「胡猿」は「あしか(葦鹿)の異名」となっている。

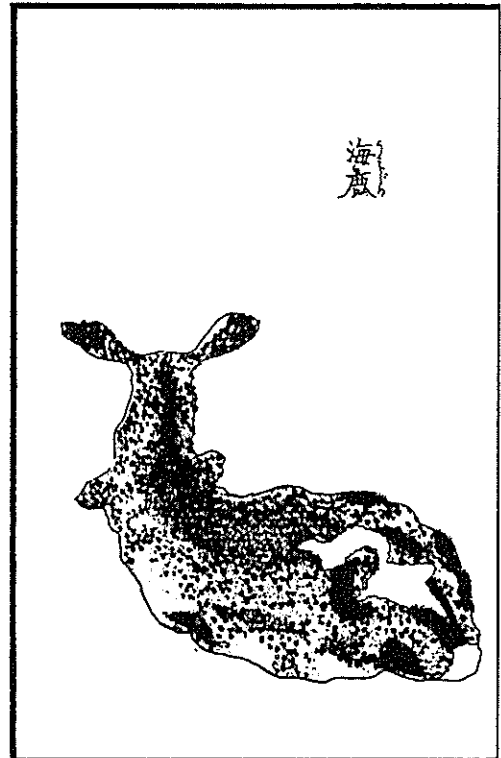
「胡猿」という字句が現在のトド *Eumetopias jubatus* を指すようになったのはいつなのであろうか。筆者はこのあたりを知りたいと思っている。呼称に見る混乱は、江戸期の博物学と現代の博物学がどこかで途切れていることを実感させる。

#### 引用文献(江戸時代の古典等は省く)

- 本間義治, 1991. 耽奇漫録に載せられた海獣(鰐脚類). 鯨研通信, (381): 15-16.
- 池原宏二ほか, 1990. 新潟県下に漂着した海産哺乳類. 鯨研通信, (378): 1-15.
- 伊藤徹魯, 1979. ニホンアシカ雑感. 哺乳類科学, (39): 27-40.
- Kuroda, N., 1938. A list of the Japanese mammals. Maruzen.
- 中村一恵, 1991. 伊豆諸島に生息していたニホンアシカについて. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (20): 59-66.
- 西脇昌治, 1965. 鯨類・鰐脚類. 東京大学出版会.
- 左古隆, 1985. 七ツ島の近世胡猿卵. 舩倉島・七ツ島(大島) 遺跡詳細分布調査報告, 29-38. 石川県輪島市教育委員会.
- 上野益三, 1987. 日本動物学史. 八坂書房.
- 山下欣二, 1990. 近世古文書に見る海獣類①アシカ. 海洋と生物, 12: 230-233.
- 柳田園男・倉田一郎, 1938. 分類漁村語彙, 民間伝承の會.

#### 図の説明

小原良貴(桃洞)の『桃洞遺筆・巻中』に見る海鹿の図。アメフラシには二対の触角(触角と頭触手)がある。これを鹿の角に見立てて、海鹿と呼んだのではあるまいか。



## ストランディング・レコード—18

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-139	31/05/91	スナメリ (D)	1	愛知県碧南市 川口町 (矢作川河口)	増田元保 (碧南海浜 水族館)	体長0.82m、雄
O-140	15/04/91	<i>Mesoplodon</i> sp. (D)	1	新潟県西頸城郡 能生町	水澤六郎	体長5.40m
O-141	24/06/91	マイルカ (D)	1	新潟県上越市 谷浜(刺し網)	水澤六郎	体長1.94m、体重80kg、 雌
O-142* <sup>1</sup>	4/06/91	カズハゴンドウ (D)	1	三重県志摩郡 阿児町 甲賀海岸	山本宗市	体長2.4m、体重170kg、 雌、 新聞情報(中日新聞 6/06/91)翌日に死亡。
M-31* <sup>2</sup>	12/06/91	ザトウクジラ (D)	1	神奈川県横須賀市 長井(定置網)	西岡克夫	体長5.7m、雄。4日 後に荒崎海岸ミノワ 浜で漂着を発見。
O-143	27/05/91	<i>Kogia</i> sp. (D)	2	東京都小笠原母島 長浜	山口真名美 (小笠原海洋 センター) 森 恭一 (東海大学)	大小2個体、小型個 体は推定体長0.95~ 1.05m、小笠原海洋 センターで骨格標本 を作成。
O-144	26/07/91	<i>Mesoplodon</i> sp. (D)	1	新潟県柏崎市 宮川 向山海岸	水澤六郎	雄
O-145	?/01/91	ネズミイルカ	1	北海道小樽市 (刺し網)	木村方一 (北海道教育大 札幌分校)	体長1.40m、雌 同大地学教室で骨格 標本作成、収蔵。
O-146	4/01/90	ハナゴンドウ	2	三重県尾鷲市 梶賀町 (定置網)	若林郁夫 (鳥羽水族館)	
P-008	15/07/91	トド (L)	1	三重県志摩郡 阿児町 安乗海岸	若林郁夫 (鳥羽水族館)	体長3.0~3.5m、雄 数日後に死亡漂着。

\*<sup>1</sup> この個体の情報については、志摩マリンランドの大久保修三様、鳥羽水族館の若林郁夫様からも、それぞれ計測値及び写真をお送り戴きました(表示の計測値は志摩マリンランドの報告によります)。

\*<sup>2</sup> この個体を扱った情報は、京急油壺マリンパークの西村芳博様、金子和久様から計測値を、神奈川県立博物館の中村一恵様から新聞記事(神奈川新聞、27/06/91)をお送り戴きました(表示の計測値と性別は京急油壺マリンパークの報告によります)。

種類欄の(D)は、漂着発見時に死亡状態を、(L)は漂着発見時に生存を示しています。